
流星のロックマン 4 オペレーションチーム

blue sea

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4 オペレーションチーム

【Nコード】

N4974Q

【作者名】

blue sea

【あらすじ】

メテオGの事件から半年…ノイズの影響が減り平和になった世界で6年生になったスバル達はもとの平和な生活に戻っていた…そんな平和な毎日に突如現れた大いなる闇。スバル達はこの闇に立ち向かっていけるのだろうか？光と闇が交差する世界でスバルは何を見る……？

プロローグ（前書き）

読まなくても本編には支障はないです。

ブローグ

時は220X年…

私達の星、地球では極限まで発達した電波を中心としたテクノロジーにより人々の暮らしは豊かなものに変わっていた。

何から何まで電波で構成された世界。最近にいたっては電波で物質を実体化することも可能になった。

電波を使えばできないことはない。というぐらい電波の力はものすごく便利なものだった。

一見、メリットの塊のように見えるがそれ相応のデメリットもある。それがノイズという副作用だ。

一度、地球はこのノイズによって意図的に人類滅亡の危機まで追い込まれたことがある。

それ以外にも宇宙人の襲来。古代文明の復活。地球はこの1年で数々の危機に襲われた。そんな地球を何度も救ってくれたのが地球の住民。ロックマンこと星河スバル。

最初は根暗で引きこもりだったスバルも今では幾多も地球を救ったヒーローだ。地球に接近していたメテオGを破壊し、父も地球も救ったロックマン。

敵の組織が壊滅し、すべてが終わり、平和な世界になったように思えたのだが…

メテオG事件から半年…

物語はここから始まる……

朝

「おい！スバル！いい加減起きろ！今日は学校で始業式つてのがあるんじゃないのか？」

今怒鳴ってるのはしつての通りウォーロック

宇宙からきたFM星育ちのAM星人

スバルが地球を救えたのもウォーロックのおかげといっても間違いない

「うゝん……もう食べれないよ……」

「おい！いつまで寝ぼけてやがる！とつとと起きろ！」

「ん……ハッ！……や、やばい……遅刻だ！」

スバルは急いで布団から起き上がり、最速で学校へいく準備をして1階へおりた

「あら、スバル、そういえばさっき委員長さん達がむかえにきてたわよ。でもあんまりスバルが起きないから先に行っちゃったわよ？」

「や、やばいはやくしないと委員長になにされるかわからない……」

スバルは急いで朝食を口に詰めて玄関に急いだ

「行つてきまーす！」

スバルは猛スピードで学校にむかった

「まったく……いつもこんな調子じゃ先が思いやられるぜ……」

転校生（前書き）

今回からウォーロックなどウィザードのセリフには『』をつけたい
と思います

転校生

今、スバルはダッシュで学校にむかっている

久々の学校ということでスバルも楽しみだった

なんとか校門をくぐり教室に入ると生徒達はまだたちあるいたりしている

どうやらギリギリまにあったようだ

「ふう…ギリギリセーフ…」

「ギリギリセーフ……じゃないわよ!!」

「ビクッ!」

今怒鳴ったのは委員長こと白金ルナ

今では委員長ではなく生徒会長なのだが生徒会長になった今でも皆委員長と親しみある名前である。ウィザードはモード

「まったく…私達がせっかく迎えにいつてあげたのに私達を先に行かせるなんていい度胸してるじゃない?」

「いや…あの……すいません…」

「まあスバルらしいけどな」

今喋ったのは牛島ゴンタ

牛井が大好きでスバル同様電波変換してオックス・ファイヤになることができるウィザードはオックス

「そっぴや今日は転校生が来るらしいな」

今喋ったのはジャック

かつてはスバル達の敵、ディーラーの一員であつたが今ではスバル達の仲間

ディーラーにいたという過去はサテラポリスの暁シドウがなんとかしてくれたいらしい

スバル同様電波変換したらジャック・コーヴァスになる

ウィザードはコーヴァスだが再びヨイリー博士に再構築してもらい改心したようだ

ちなみに暁シドウは委員長同様、メテオG事件の後サテラポリスがシドウのデータをかき集めてなんとか復活させたいらしい

しかし復活したときのシドウはボロボロでずっと包帯グルグルで入院していたが最近退院したらしい

「どうやらマロ辞典によると転校生は女の子のようですな」

今喋ったのは最小院キザマロ

背が低いのをきにしている電波変換は出来ないがウィザードのペデリアとともにスバル達をサポートしてきた

「へえゝ転校生かゝ楽しみだね」

スバル達が話しているとどうやらクラスの皆は転校生の話で持ち切りらしい

「はい、じゃあみんな席につけ」

すると育田先生が教室に入ってきた

クラスの皆は席についた

「じゃあ今日はみんなしってると思うが転校生が一人来る」

「どんな転校生なのかな?……」

「ドキドキ……ワクワク……」

クラスみんなは転校生を楽しみにしている

「どんな子なのかな?……」

スバルも同様に気になっている

『ん……この感じ……まさか……』

「それじゃあ入ってきていいぞ」

ガラッ……

転校生が入ってきた

衝擊

.....

クラスのみんなは衝撃のあまり声がでずに固まっていた

何故かというと転校してきたのが今ではドラマ出演、グラビア撮影などをこなす超人気国民的アイドル、響ミソラだからだ

するとミソラが自己紹介をした

「ベイサイドシティから引越してきた響ミソラです！よろしくお願ひします！」

ミソラが自己紹介をおえると

[illegible]

クラスのみんながハモった

「なっ……あのアイドルのミソラちゃんがコダマ小学校に……」

「本物の……あのミソラちゃんが……私のすぐそばに……」

クラスのみんなは衝撃的すぎて半分放心状態になっている

「ミ、ミソラちゃん？ な、なんでコダマ小学校に？ ……」

スバルも状況をあまりよみこめていない

「ハッハッハッ！みんな驚きすぎだろう！」

育田先生がいうと

「「「「「驚くよ！……！」」「」「」「」

またクラス中がハモった

「……コホン……じゃあ響の席は……」

「「「「「！……！」」「」「」「」

クラスの男子全員の目が光った（一部を除いて）

「ミソラちゃんは僕の隣だ……」

「ミソラちゃんが俺のとなりに……」

「ミソラちゃん……もちろん俺の……」

男子達がそんなこと思ってる

「先生、私星河君の隣がいいです」

「へっ！……ボク??」

「ん？そつか。星河、いいか？」

「え、あ、ハイ……大丈夫です」

「...うん」

提案

H Rと始業式が終わったあとスバルとミソラが質問責めにあったのは言うまでもない

「はあ〜」

「大丈夫スバル君？」

「う、うん」

（すごいな〜ミソラちゃん…あんなに質問責めだったのに…）

ミソラは仕事上そういうのの対応の仕方はわかってたし、なれていたのでたいしたことはなかった

「いや〜それにしてもビックリだぜ。まさかミソラちゃんがコダマ小学校に転校してくるなんてよ」

ゴンタが言った

「そういえばどうしてミソラちゃんはコダマ小学校に……？」

キザマロが聞くと

「え〜とね、前の学校にはあんまり友達って呼べる人がいなくて…こっちにはスバル君とかがいるしマネージャーさんをお願いしたらOKもらったってわけ！」

「なるほど…じゃあこれからは毎日ミソラちゃんに会えますね！」

「うん……でも仕事のこともあるし、たびたび学校に来れない日もあると思うけど、みんな仲良くしてね？」

「……もちろん（よ）！」「……」

すると先生がはいってきた

「ほら、席につけ、授業始めるぞ」

クラスみんなは席に着いて教科書を開いている

育田先生の授業はおもしろいと評判なのでスバル達にとってはべつに苦ではない

（久々の授業だ…）

春休みをはさんでいたので今日が一学期最初の授業ということになる。

春休みは宿題がないので恒例のゴンタの宿題忘れはなかったが、

「牛島。春休みは宿題がないからって勉強せずに遊んではつかじやなかったのか？」

「へ…そ、そんなことないぜ？」

あきらかにゴンタはあせっている

「じゃあここの問題答えてみる」

先生はゴンタをおいつめるようにニヤニヤしている

「え、え〜と……12cm??」

「ちがいますよゴンタ君!……ここは56cmです……」

隣のキザマロがヒソヒソ声で教えてくれたが

「あ、間違った……46cm!」

「だーかーらー!……そうじゃなくて……」

「牛島……春休みだからってあそんではっかじゃダメだぞ……」

「面目ねえ……」

「ハハハハ!」「」「」

見慣れた光景だがすこし新鮮に感じる

久々の授業がおわってスバル達は帰ろうとしていた
すると委員長が

「ねえ、ミソラちゃんが転校してきたってことで今度の日曜日みんなでどこかに出掛けない?」

「俺はいいぜ?」

「僕もたぶん」

どうやらみんな賛成のようだ

「じゃあみんな行きたいところを明日までには決めておくこと、いわね？」

「「「「「りょーかい！」「」「」」」」」

そしてチャームがなりみんなは下校を始めた

家族

スバル達は今下校中

といつても委員長達とは別れて今はスバルとミソラの二人である

ミソラの家はスバルの家方面にあるっぽいのでスバルがミソラにきいた

「そついえばミソラちゃんの家ってどの辺にあるの？」

「フフツ…」それはねー、もうすこししたらわかるよ」

「????」

そんな会話をしているうちにスバルの家に着いてしまった

「僕家まで来ちゃったけど、結局ミソラちゃんの家ってどこなの？」

「フフツ……ここだよ」ミソラが指さす先にはスバルの家しかない

「あのーミソラちゃん…ここは僕家……」

するとミソラはニツコリ笑って

「今日から私、スバル君の家に住むことになったんだ！よろしくね」

「へえ〜……………つて、えええええっつ！……！！！」

スバルは驚きのあまり大声をだしてしまったのでそれに気づいたあかねが外にでてきた

どうやら状況を理解したのかスバルとミソラをみた瞬間ニヤニヤしだした

「あらスバル、それにミソラちゃんも、おかえりなさい」

するとスバルは怒ったような顔になってあかねに怒鳴った

「母さん！！なんでミソラちゃんが家に来るってこと言わなかったのさー！！」

「え、だってそのほうがおもしろいじゃない」

「……………」

スバルが呆れたような顔をしているとミソラが涙目＋上目使いで話しかけてきた

「スバル君…もしかして嫌だった？……………」

（うつ！…………カワイイ…）

「い、いや、そんなわけないよ！むしろ大歓迎だよ！！」

「ホント！？ありがとう！！」

そしてミソラはあかねに挨拶をした

「あの…これから色々迷惑かけるかもしれませんが……よろしくお願いします！」

「フフツ、こちらこそよろしく、あと今日からあなたの家はここだ

と思って生活していいからね、それから今日から私達のことはお父さん、お母さんと呼ぶこと、いい？」

「は…はい！……」3人の会話が終わるとスバルとミソラはスバルの部屋にいった

ミソラの部屋はあるのだがまだ前に置いてあったものが色々散らかってる状態なのでかだづけるまでスバルの部屋にいさせてもらっている

「そういえばなんでミソラちゃんは僕の家になんか？」

「えーとね、転校するとなるとどこに引越そうかって話しになってこの辺で一番頼れたのがスバル君だったからお母さんにたのんだらOKもらってたんだ！」

「なるほど……だったら一言僕にいつてくれればよかったのに」

「ゴメンね…でもスバル君のお母さんが言わないほうがおもしろいっていうから……」

「そ、そっか…」

（まったく…母さんは…）

スバルとミソラはその後たわいもない会話をして夕食を食べた大吾は出張にいつていて今は家にいない

「ふう………」

一段落つくとスバルは椅子のうえで伸びている

コン、コン……

ミソラがスバルの部屋にきたようだ

誘い

「スバルくん…ちょっといい？」

「う、うん」

ミソラはスバルの部屋に入るとスバルの布団の上に座った

「あのさ、ルナちゃんが日曜日みんなでどっかに出掛けようっていつてたけどスバル君決めた？」

「僕はただけど…ミソラちゃんは？」

スバルがきくとミソラはすこし考えたような顔して

「みんなでボーリング…なんてどうかな？」

「ボーリングか…いいね！」

スバルも賛成したらしくスバルとミソラはボーリングを提案することにした

「そういえばさ…ミソラちゃん仕事は大丈夫なの？」

「うん、日曜日はなにもない日なんだ！」

スバルがそっか、と言うとミソラはまだ何かいいたそうな顔をしていた

ミソラがモジモジしているとハンターからミソラのウィザード、ハ
ープが小声でミソラに話しかけてきた

『ミソラ……本当はそれをいいにきたんでしょ…はやく言っちゃい
なさい！……』

「う、うん…」

「ミソラちゃん？」

するとミソラは顔を赤くしながらスバルに話しかけた

「あ…あの…もしかしたら来週の月曜日学校休みだから一緒にど
つかいかない？」

ミソラはいい終わったあともしこし顔を赤くしたまま下をむいている
スバルにもことわる理由がなかったので顔を赤くしながらOKと返
事をした

「本当！？、やった！じゃあ、いくとこ決めておくから絶対だよ！」

ミソラは用件をすませたようなのでかだついたらしい自分の部屋に
戻っていった

『スバル……』

「何？ウォーロック？」

『さっきから顔が赤いけど大丈夫か？…』

ウォーロックが言つとスバルが急に慌てだして「べ、べつに大丈夫

だよ!」といいベットにもぐった

『なんで、慌ててんだ……??』

ウォーロックはわけもわからずハンターに戻っていった

——ミソラの部屋——

ミソラは部屋に入ってすぐにベットにダイブした
ミソラの顔は部屋に戻った今もまだ赤くなっている

「や、やった…スバル君とまた二人でお出かけできる…」

よほど嬉しかつのかミソラはベットで足をばたつかせながらキヤーキヤーいつている

『よかったわねミソラ、スバルからOKもらって…』
「うん!」

ミソラは枕に顔をうずめている

『ミソラ…』

「何、ハープ?」

『スバル君と出掛ける日あのことスバル君に言うんでしょ?』

「う、うん……」

「そう……がんばりなさいよ……」

ハープはフツというとハンターの中に戻っていった

そのころ……

「星河スバル君………か………」

スバルとさほど変わらない身長と体格をした少年がつぶやいた

「世界を3度も救ったヒーローか………僕とどっちが強いかな？………」

少年はつぶやくと空の彼方へきえてしまった

危機

「ふわぁ〜」

スバルはベットから起き上がり時計をみた
時計の針はまだ6時をさしている

普段、スバルは早起きではないが今日は自然と目がさめてしまった
(すこしはやくおきすぎたかな……?)

スバルが起きたのに気づいたのかウォーロックも起きてきたようだ

「ん…、今日はやけにはやいな、スバル？」

「うん…なんか目がさめちゃって…」

スバルはとりあえず顔を洗いにいこうと1階におりた
洗面所にいこうとした所でちょうどミソラと鉢合わせた

「あ、スバル君、おはよう、はやいんだね？」

「うん、今日はなんだか目がさめちゃってね…」

スバルはミソラに挨拶をすませると再び洗面所へいこうとした

「あ！ちょっとまって！スバル君！」

「ん？どうしたの？ミソラちゃん？」

スバルはまだ寝ぼけているのかあくびをしながらすこし腑抜けた声

でいった

「あのさ今度の月曜日一緒に出掛けようっていったじゃん？」

「うん」

「それでさ、行くところ決めたんだけどベイサイドシティに新しくできたドリームパークっていう遊園地にいかない？今、テレビとかで話題なんだ！」

「あ！それならしってるよ！昨日テレビでやってるのみたから…、評判いいらしいね？」

「うん！じゃあ決まりね！絶対だよ？」ミソラは喋り終わると嬉しそうに部屋に戻っていった
スバルは顔を洗い終わって一段落つくとリビングのソファアに座ってリラックスしていた

「ん？……」

『どうした？、スバル？……』

するとスバルは急に焦ったような顔をして汗を流し始めた。しまいにはブルブル震えだした

『お、おい？大丈夫か？』

「今日、委員長達が迎えにくる……」

『それがどうしたんだ？、いつものことじゃねえか』

「ち、違うんだ……委員長達が迎えに来るってことは当然ミソラち

「やんもくるでしょ？」

『まあ、そうなるだろうな…でもそれがどうしたんだ？』

「どうしたって……朝にミソラちゃんが僕家から出て来るってどうかんがえてもマズイでしょ！」

スバルはどーしよ、といいながらリビングをうろろし始めた

『何だよ…そんなぐらい話せばどうにかなんだろ？』

たしかに実際話せばわかってくれるかもしれないがこのことを話すと学校中に広まっていく恐れがあるのでスバルはそれを恐れていた（みんなをしんじてこのとは誰にも言わないでつていえばわかってくれるかな？）といったも噂とは意外と知らないところから広まっていくなのである。もし、スバルの家にミソラが住んでいることがわかれば芸能ニユースになることは間違いない

今やスバルもミソラぐらい有名だ

名前を聞けば誰もがあのヒーロー、ロックマンを思いうかべるだろうといつてもスバルという名を知つても顔を知らない人が多いのだがもしヒーローの家にアイドルが住んでいることがわかれば確実に芸能ニユースになる

目立ちたがらないスバルにとってはこれは絶対にさげなければなら
ない

「しかたない…みんなを信じよう…」

スバルは結局いつものメンバーに何とか説明して逃れる道を選んだのだった

予感

「ふう……」

スバルとミソラは学校へ行く準備をしてまだ時間があるのでリビングでくつろいでいる

ミソラと母さんはもうすでに意気投合したのか楽しそうに話している

「あの……ミソラちゃん？」

「ん？何スバル君？」

「その……今、委員長達が迎えにくるんだけど学校のみんなには僕達と一緒に住んでること内緒にしてっようお願いするからさ……ミソラちゃんもお願いね？」

「え……なんで？……スバル君もしかして私と住むのが……」

「い、いやそうじゃなくて！、もし僕とミソラちゃんが住んでいることがわかれば大変なことになるでしょ？」

するとミソラはむすっとしたような顔をしていた

「私は別にいいけどな？」

「だっ！、だめだよ！絶対だめ！」

スバルの必死の抵抗によりなんとかミソラはあきらめたようだが、
なのでミソラはすこし機嫌の悪そうな顔をしている

そして…

ピンポン！…

委員長達がスバルの家にやってきた

スバルはチャイムにきつくとミソラと一緒に玄関にいき戸を開けた

「おはよう、スバルく……………」

「「「！！！？」「」」」

委員長とゴン太とキザマロはスバルの後ろにミソラがいるのをみて
口をあけながら啞然としている

「な…なんでスバル君の家からミソラちゃんが…………？」

「どういうことだスバル！説明しろ！」

キザマロとゴン太はスバルを問い詰めている
委員長にいたってはどす黒いオーラを発している

スバルは圧倒されながらもなんとかみんなにミソラのことを説明した

「なるほどね……まあ、そういうことならしかたないわね……」

とはいったものの委員長からはまだ黒いオーラがでている

（委員長恐い……でもまあみんなわかつてくれたからいいか……）

スバルは心の中でフウ、とため息をついた

「ミソラちゃんと一緒に住むなんてうらやましいぞ！スバル！」

そういいながらゴン太はスバルの背中をバシバシたたいてくる

「ハ、ハハハ……」

スバルは笑うしかなかった

その後いつものメンバーは学校へ向かった

委員長達はミソラの案のボーリングに賛成してくれた今日は金曜日
なので明後日がボーリングの日である

スバル達は学校にに着き、またいつものどうりの授業が始まった

授業が始まって10分、クラスのみんなは計算問題を解いている

『!!!』

ウォーロックは突然ハンターの中でキョロキョロし始めた

「ん?…どうしたの?…ウォーロック?…授業中だよ?…」

スバルは小声で話しかけた

『なにか…いる……』

ウォーロックがそんなことをいうのでスバルもあたりを見回すが見えるのは問題を解いている生徒だけ

「スバル!…屋上だ!……」

「え?屋上になにかあるの?…」

『なにか…感じる……とにかく授業をさっさとぬけて屋上にいくぞ!』

「だっ、だめだよ!…そんなことで授業抜けるなんて…」

さっきからスバルがウォーロックとボソボソ喋っているのだからそれに気づいたミソラが話しかけてきた

「どうしたの？…スバル君？…」

「いや……なんかさっきからウォーロックがうるさくて……」

スバルはウォーロックがうるさかったのでハンターの電源をオフにしようとした

『ま、まで！…スバル！…本当に感じるんだ！……何か強力な……』

「……………」

スバルもさすがにウォーロックのいつてることを気にしはじめた

「わかったよ……見に行こう……」

スバルはウォーロックが喋っていたことをミソラに話した

「ってことで……今から僕は教室を抜けるから…僕がいなくなったってこと先生が気づいたら我慢できなくなってトイレに行きましたっていつておいて……」

「うん…わかった…気をつけてね…」

スバルは頷くと抜き足で教室を抜けて屋上へむかった

アダム

スバルはウォーロックにいわれたとつりに屋上にむかい辺りをみまわすがこれといって変化はない

いつもど通りの屋上だ

「ウォーロック……何もないじゃないか……」

『いや……そんなはずは……』

『!?!?』

ウォーロックは突然ビクついてエレベーターの上をみる

『スバル!、上だ!』

スバルもウォーロックに言われたとつり瞬時に振り返る

そこにたっていたのはスバルと同じ年齢ぐらいだろうか、銀髪で黒い衣をまとっている。顔立ちはなんだかまだ幼い感じがする

その少年はスバルが自分に気づいたのに気づくと笑みを浮かべてス

バルに話しかけた

「君が…星河スバル君だね？」

「そうだけど……君は？……」

スバルがたずねるとウォーロックが割り込んでくる

『コイツ……やべえぞ……スバル……』

「おいおい……人を雰囲気とかで判断するもんじゃないよ」

少年はそういうとスバルのほうを向く

「おっと……自己紹介がまだだったね……僕はアダム……」

「アダム？………一体僕に何のよう？……僕のこと知ってるみたいだけど……」

「いや……べつに用っていうほどでもないんだけどね……」

そついうとアダムはその場からフツと消えた

「き、消えた?…」

その時スバルは瞬時に後ろに気配を感じて後ろを振り返るとさっきまで上にいたはずのアダムがたついた

「なっ……!?!、一瞬で…」

スバルが啞然としているとアダムがつぶやく

「すこし君の実力が知りたくてね…」

アダムはそついうと自分のハンターの中を調べ始めた

「うゝん…さっき拾ったこの残留電波でいいかな?………」

するとアダムは1枚のプログラムをハンターの中からだし手の平で握った

「よつと…」

すると突然アダムの手の平でプログラムが光だしやかで1体の電波体になっていく……

この電波体は…

オックス・ファイヤ…

「な……！オックス・ファイヤ！？」

『スバル！コイツは残留電波だ！オックスの野郎じゃねえ！』

アダムはオックスを召喚するとエレベーターの上に移動した

「さてと…みせてもらっようよ…スバル君…」

アダムはエレベーターの上からスバル達を見下ろしている

『ちくしょう！あのヤロウ……。スバル！まずはオックスだ！被害がでるまえにやつをたおすぞ！』

「わかってる！トランスコード・シューティング・スターロックマン……」

スバルはロックマンになるとオックス・ファイヤの前でかまえる

「学校に被害がでる前になんとしてでも倒す！いくぞ！ウェーブバ
トル・ライド・オン！！」

V S オックス・ファイヤ

「ロックバスター!!」

ロックマンはオックス・ファイヤに銃口を向けバスターを連射する
しかし、それもお構いなしにオックスファイヤは突っ込んできた

「ハッ!」

ロックマンはオックスタックルを横にずれてかわすとソードを装備
し、オックスファイヤをいっきに切りつけた

「ブロッ!!」

オックス・ファイヤは若干怯むがすぐに体制を立て直しロックマン
にカウンターパンチをくりだす

「ぐっ!...」

「さすがだね… ロックマン。ここまでではやくデリートされるとは…」

アダムはそういいながらまだ拍手をしている。その余裕にすこし腹が立ってきたスバルは怒鳴りつけるような声で話しかけた

「君は一体何物なんだ？… 目的はなんだ！」

スバルがいうとアダムはニコツとした顔になり後ろを向く

「それは言えないよ… 今は… ね…」

アダムはそういうとスバルに軽く手をふる

「今日は楽しかったよ！君の戦いも見れたし… じゃあまた会おうね！バイバーイ！」

「まっ！、まてっ！」

スバルが言ったところにはもうすでにアダムの姿はなかった

『ちっ！……にげがったか……』

ウォーロックは舌打ちをする。

「しかたない……ここにいてもしょうがないから教室に戻ろう」

スバルはそう思いエレベーターにのった

（アダム……一体なにものなんだ？……）

照れ

スバルが教室に戻るとすでに授業は終わっていたらしくスバルのこととはなんとかミソラがごまかしてくれたようだった

しかしそれでも勝手に抜け出すのはいけないとすこし注意されたみたいだったが…

スバル達は今、授業が終わったので帰る準備をしている

すると委員長がスバルとミソラに話し掛けてきた

「スバル君、ミソラちゃん。明日のボーリングのことなんだけどロツポンドーヒルズにあるところにいると思うんだけど…」

「うん！いいと思うよー！」

「じゃあ明日12時にウェーブライナーの改札前に集合ね」

二人はうなずくといつもどおりみんなで下校している
委員長達と別れてミソラと二人っきりになると屋上でのことをスバルはミソラに話した

「へえ〜……そんなことがあったんだ…」

「うん…アダムには何か目的があるみたいだし……。やっぱり曉さんとかに知らせたほうがいいのかな……。？」

「うん……。いちおう知らせたほうがいいと思うな…」

「やっぱりそうだね…」

会話が途切れるとミソラはスバルに別の話題を持ち掛けた

「そういえばスバル君。明日ボーリングだけどスバル君ってやったことある？」

スバルは真剣な表情から緩んだ表情に変わり「初めてだよ」と言った

「実は私も初めてなんだ！だから明日がすごい楽しみ〜」

「僕も初めてだからすごい楽しみだよ！」

（でも私が本当に楽しみなのはその次の日なんだけどな〜）

そう。実際ミソラが本当に楽しみにしてるのはボーリングではなくその次の日である。
当然そんなことはスバルには言えないが…

二人は家につくとミソラは曲作り。スバルは戦いで疲れてたのか布団に入ってしまった

そして時が流れて夜…

スバルとミソラは夕食を食べ終えてスバルの部屋で遊んでいる

スバルはミソラとゲームをしていると突然ゲームを中断し、何かを思い出したようにあわててハンターを取り出した

「??? スバル君どうしたのきゅうに…?」

「曉さんに連絡するの忘れてた!」

急いでシドウの番号に連絡すると6、7秒コールしたところでハンターの画面にシドウが出た

「よう！スバル、久しぶりだな。今日はどうした？俺に会いたくなつたとか？？」

スバルはシドウの冗談を軽くスルーすると今日の出来事をシドウに話した

「アダムか……それならもうしってるよ。最近本部にも単独で侵入してきた謎の少年だ……」

（サテラポリスにも姿を現したのか……）

「それで……何かわかったんですか？」

「いや……ただ自分がアダムだということを名乗って俺達をもて遊んだあげく逃げていきやがった……」

（僕の時と同じだ……）

「あいつからは強大なエネルギーを感じられている。単独でセキユリティを破ったほどのやつだからサテラポリスは危険人物として今、情報を集めてるところなんだ。スバル達も何かあったらすぐに連絡してくれ。無理はしないでいいからな。危険だと思ったらすぐに逃げるんだ。わかったな？」

「はい。わかりました」

スバルはハンターの画面をきろうつとした

「あ。あとスバル。さっきから気になってたんだがなんでお前の家にミソラがいるんだ？……まさかお前ら……付き合っ……？」

シドウが言うとスバルとミソラは顔を真っ赤にしてちがいます！といい、事情を説明した

「ふん……まあいいや。スバル、いくら同じ家だからってミソラに変なことするなよ」

「し、しませんよ……！」

シドウはハハッと笑うとニヤニヤしながら、じゃあなといい電話を切った

スバルとミソラは顔を真っ赤にしてしばらく沈黙が流れた
すこしたってミソラがしゃべる

「わ、私…そろそろ戻るね…」

「う、うん…」

ミソラはすこし急ぎ足でスバルの部屋をでて、自分の部屋に戻った
するとウォーロックがスバルにこんなことをいつてきた

『お前、ミソラのまえだとよく顔赤くなるよな?』

スバルはよりいっそう顔を赤くし「そ!、そんなことあるわけない
だろ!」と怒鳴ってベットにもぐってしまった

『????????』

ウォーロックはわけもわからず、ハンターの中に入り、自分ももう
休むことにした

ロツポンドーヒルズへ

時計の針は今9時をさしている。スバルはまだベットの途中で眠っている。

ちなみにウォーロックもまだハンターの中で眠っていた。

普段、スバルの目覚まし役をやらされてるウォーロックにとっては貴重な休日である。

しばらくしてミソラが部屋に入ってきた

「スバルく〜ん！おきてー！、朝ご飯ができたって！」

ミソラがスバルの体を揺るとスバルは目をこすりながら眠そうに起き上がった

「ん………どうしたの？………ミソラちゃん………」

「お母さんが朝ご飯ができたからおりてこいだって！」

スバルはわかったというとパジャマから服に着替えて下に降りた

朝ご飯を食べ終わるとスバルとミソラはお昼から委員長達とボーリングがあるのでその準備をしている

「ふーっ…準備完了！」

スバルは準備はすませるともう時間がきていたのでミソラの部屋を
尋ねた

「ミソラちゃん？…準備できたー？」

スバルはドア越しにミソラをよぶとすぐに返事が返ってきてドアが
開いた

「じゃあ、そろそろいこっか？」

「うん！」

スバルとミソラはあかねに挨拶をして家を出た

――ウェーブライナー改札前――

スバルとミソラが改札前につくとまだゴン太の姿がない
どうやら相変わらぬ遅刻のようだ

「あーもう!!…ゴン太は何をやってるの!？」

委員長はゴン太がなかなかこないことにイライラしている

そしてギリギリ1分前…

ゴン太が慌てて家の中からでてきた

「わ、わりい!遅刻しちゃった!」

さすがのスバルでも午後集合なら遅刻することはないのだからゴン太の遅刻ぐせは相当なものである。

ゴン太が来ると委員長がガミガミと説教をかます。

ゴン太の言い分としては昨日遅くまでゲームをしていたらしい
当然そんなのは委員長に通用するわけがないのだが…

そんなことをしているうちにウェーブライナーが到着した

「さて、ゴン太もきたことだし…みんないこうか？」

6人はウェーブライナーに乗り込み、ロップンドーヒルズを目指した

ボーリング

6人はロッポンドーヒルズにつき、今はボーリング場にいる

「へえ…ここがボーリングを場かあ…」

スバルは初めてなので珍しそうに辺りを見回す

委員長以外もスバルとおなじ感じなのでどうやら委員長以外はみんなはじめてらしい

「騒がしいな……」

人が多いところが苦手なジャックにとってはすこし居心地の悪い空間だった

6人はいつでもプレイできる状態になるとまず、真っ先にゴン太がレーンの前にたつ
どうやらやる気満々のようだ

「よし…！行くぜ！！」

ゴンはボールをかまえてとりあえずなげるが…

ゴロゴロゴロ……ガタンッ……

「ゴン太君……ガーターですね……」ゴン太は悔しそうに控えに戻る

その次に委員長がなげると当然のようにストライク

その後もジャック、キザマロ、ミソラとなげてジャックはストライク。キザマロはガーター。ミソラはスピアという感じになった。

ジャックはともかく、まったく初めてでいきなりスピアというのもすごいものである。

「なかなか難しいですね……」

キザマロがつぶやく

そしてついにスバルの番……

スバルはボールをかまえてレーンの前にたつ

「スバル君、頑張つて！」

後ろでミソラがスバルに声援を送る

スバルはその声援にこたえたとボールをいきになげた。ボールはそのまま綺麗な軌道を描いてピンをすべてはじいた。結果は見事なストライクだった。

「や、やった…！」

スバルは嬉しさのあまり声をだしてガッツポーズをする

「スバル君、すごい！」

「やるわね………」

その後もどんどん上げて結局1位は委員長。2位はスバルとジャックで3位はミソラといったかんじになった。どれも最初にしては高得点だった

ゴン太とキザマロについてはあえてふれないでおこう…

再来（前書き）

気づいた人もいます。

ボーリングにいく日は日曜日のはずなんです。が、アダムがでてきたあの金曜日の時点で、何故か明日という設定になっています。

ということでこのボーリングの話は土曜日。

ミソラと出掛ける日は日曜日というふうにしたいと思います。

つまりたんなる僕のミスです……本当にすいません（汗）

再来

「やあスバル君！また会ったね！」

「ア、アダム……！！」

「スバル君知り合い？」

委員長が尋ねる。スバルはちょっとね……といい身をかまえる

（この人がアダム……）

ミソラはスバルから話は聞いていたのでアダムのことを知っていた

『スバル！コイツは危険人物として指名手配されてんだろ？だからアイツを拘束するぞ！』

「う、うん。わかってる！」

スバルはハンターをにかけてロックマンになろうとする
そこにアダムが口を挟む

「おっと……今日はべつに戦いにきたわけじゃないんだ……ていう
が僕がボーリングをやったら偶然君達がいただけだし」

『そんなことはどうでもいいんだ！きた理由がどうであれおまえを
拘束する！』

アダムはハア〜とため息をつく「やってみれば〜」とウォーロック
を挑発した。もちろん短気なウォーロックはこの挑発にのる。

『コイツ……！！なめやがって！！おい、スバル！とつとと電波変
換だ！』

「わかってる！……電波変換！」

スバルはウォーロックに言われたとつりにロックマンになると、アダムのまえでかまえる。

「俺達もいくぜ!!」

「」「電波変換!!」「」

ゴン太、ジャック、ミソラもそれぞれ電波変換し、ロックマンの後につづく

「みなさんやる気満々だね…。しょうがない…ここじゃなんだし、外でやるのか」

4人はアダムに誘導され外に向かう
その時委員長とキザマロは巻き込まれると危険なのでボーリング場に隠れてもらうことにした

そして外にでると4人はアダムを囲んで包囲した
そんな状況でもアダムは余裕の表情でロックマン達を見回す
アダムはフツツと笑い、口をひらく

「まあどうせ帰っても暇だし…あいてしてあげるよ!」

そういつてるが相変わらずアダムはヘラヘラしている。その余裕にイラついていたウォーロックはついに我慢の限界のようだ

『コイツ…!!絶対ぶつつぶす!!…!!…!!いくぞ!!スバル!』

「わかってる…!!いくよみんな!」

3人は頷き戦闘体制にはいる

「「「「「ウェーブバトル・ライド・オン!!」」」」」

V S アダム

「ロックバスター！」

「ショックノート！」

「オックスフレイム！」

「ペインヘルフレイム！」

4人はアダム目掛けて四方八方から総攻撃する
ものすごい爆音とともにアダムは爆発につつまれた

『へっ！どうだ？ちったあきいたかよ！？』

ウォーロックが爆発地点にむけて怒鳴る

しかし爆発の煙りの中からはバリアを纏ったアダムがでてくる

「ふう〜…危ない、危ない。バトルカード・スーパーバリア。」

「コ…コイツ…生身でバトルカードを…！」

「ん？あ、いや別に生身ってわけじゃないよ？いちおう今は君達と同じ電波人間だからね…。まあ君達と違って電波変換までして姿はまだかえてないけど。」

『まだってことは…やっぱりお前も電波変換できるのか…ってことは俺達みたいなウィザードがいるな？』

ウォーロックが聞くとアダムはハンターの中をチラッと見る

「そうだね…いるよ、ウィザードは…。でもまあ今はそんなことはどうでもいいんだ」

そういうとアダムはハンターからバトルカードを読み込ませる

「バトルカード…プラズマガン」

アダムはプラズマガンをロックマンにむけてはなった

「くっ…！」

ロックマンはプラズマガンをもろにくらい、その場に倒れ込む。
体が麻痺してしまったらしく必死にもがいている

アダムはロックマンに一瞬で近づき、
右手に組み込まれているソードをロックマンに突き出す

「フフッ…」

アダムはふてきな笑みを浮かべてロックマンにきりかろうとする

(や…やばい…!!)

「マシンガンストリング！」

「ん……？」

ギリギリのところではarpのギターの弦がアダムのソードに
巻き付きその勢いをとめる

arpはアダムの動きをとめるとオックス・ファイヤとジャ
ック・コーヴァスに合図を送る

「ゴン太君！ジャック君！」

ハーブノートからの合図を受け、2人はアダムに近づき左右からアダム目掛けて攻撃を放った

「オックスファイヤ！」

「ペインヘルフレイム！」

アダムは2人が近づいたときにはすでにギターの弦は切っていたらしく、2人の炎を軽くかわすとアダムはすでに装備してあったのか、両手のガトリングを2人に向ける

アダムが2人にガトリングを放とうとした時…

ズバババツ！バツ！

アダムが突然何かに切り刻まれ、その場に倒れ込む
アダムが倒れたうしろに立っていたのはソードを装備したロックマンだった

どうやらギリギリで麻痺がとけたらしい

「バトルカード……ソードファイター……。ギリギリ間に合ったみたいだね…」

『フン……。電波変換もしてない姿で全発くらったんだ…さすがにもうたてねえだろ』

倒れて動かないアダムをみて、ロックマンは案外あっさりいったなとおもいつつアダムを拘束するため倒れてるアダムに駆け寄った

「……………!?!」

しかし当然うまくいくわけもなく、アダムの体は突然そこから消えうせ、その場には一枚の木の葉がのこった

「フフツ……………」

消えたと同時に屋上から声がしたので4人はいつせいに屋上を見上げた

そこには当然のようにアダムがたっていた

「バトルカード…ヘンゲノジュツだよ…。残念だったね…」

「くっ…!」

4人はアダムをみてもう一度かまえなおす

しかし当のアダムはやる気がないのか「もういいや…あきてきたし…」といいはじめた

『なっ…！あきてきただと…！ふざけやがって……！！！！』

ウォーロックが怒鳴るとアダムは笑みをうかべる

「そんなに怒んなくても大丈夫だよ。近いうちにちゃんと相手してあげるからさ…」

ロックマンはどういう意味だとアダムに聞く

「そっだな…じゃあ君達に一ついいことを教えてあげよう」

そっというとアダムはいつもと違う雰囲気を出して言う

「世界はやがて闇につつまれる…」

「……？？」

ロックマンは何をいつてるんだ？とアダムに問う

「そうだね… まあ簡単にいえば地球が危ないってこと…」

「地球が危ないだって……？」

アダムはククツと笑うと後ろを向きロックマン達に手をふる

「いずれ時期はくる…。その時はよろしくね…」

アダムはそっい、ロックマン達に手を振ると空の彼方にきえていった

ロックマン達はアダムが逃げたのを確認すると電波変換を解いた

（アダム…君は一体…）

戦えない自分

アダムとの戦闘を終えた4人はとりあえず電波変換をとく最初にアダムにイライラしていたウォーロックが口を開く

『あのヤロー…完全に俺達をなめてやがる…』

スバルは黙り込んで何かかんがえてる様子だ。

アダムの言った地球が危ないということを気にしているのだろうそこにみんなが電波変換をといたことに気がついたのか、ボーリング場に隠れていた委員長とキザマロがスバル達にかけよってきた。

「みんなー!!!」

4人は委員長の声に気がついていつせいに声がしたほうを振り向いた。

息を切らした委員長がスバルに尋ねる。

「…大丈夫だったの？」

「うん。みんな無事だよ」スバルの言葉を聞き、安心したのか2人はホッ、とため息をついた。

とりあえず状況が安定したのでスバルは学校の屋上のこととシドウが言っていたサテラポリスで危険人物になっていることをみんなに話した。

その話を終えるとジャックがつぶやく。

「サテラポリスのセキュリティを破るやつとはな……どうりで最初みたときからただものじゃねえとは思ったよ」

「確かに……あいつからは何か……とにかくなんかヤバイもんを感じたぜ。」

ゴン太は不器用なりにそのヤバさを説明する。

みんなもゴン太と同じ感想だ。

彼からはとにかく危険なオーラを読み取ったのだ。
続けてゴン太が会話を進める。

「それとよ……アイツのいつてた闇につつまれるだとか地球が危ないだとかよ……ありやどいう意味なんだ？」

『さあな……？でもあんまりいい意味じゃねえのは確かだな』

6人は息をのむ。アダムのいったことが何となく冗談ではない。そんな気がしていたからだ。

（また始まっちゃうのかな…。戦いが…。）

スバルの頭の中でその言葉が駆け巡る。

（やっと…平和になったのに…）

スバルが黙って考えているのをみてミソラがみんなに向けて口を開いた。

「今考えてもしょうがないよ。とりあえず今日はもう家に帰ってまた後日話し会おう?」

ミソラがそう言うところとちょうど帰りのウェーブライナーがきたようだ。

「そうね…。今日はもう遅いし帰りましょっか?」

みんなは返事をして順番にウェーブライナーにのりこんだ。
車内には同じくコダマタウンに帰ると思われる客が何人か乗っている。

スバル達はとりあえず後ろのほうにいくつかあった空いてる席に座った。

ウェーブライナーが動き始めてから誰も口を開かない。車内の空気もあってか沈黙が続く。

しばらくしてずっと黙り込んでいるスバルに委員長が話し掛けてきた。

「スバル君…」

「ん？…あ、何、委員長？」

「あなた…また一人で抱え込もうとしてるでしょ？」

「え？…別におもってないよ…？」

突然思いもしないことを言われてスバルはすこし戸惑う。

「あなたはいつもそうだから……。なんでもかんでも一人でかかえこんで自分だけで解決する。あなたの悪い癖よ。」

急にどうしたの？とスバルは委員長に聞くと不安げな顔して答える。

「宇宙人が地球にきたときも、ムー大陸のときも、メテオGのときもあなたは一人でつぶしつていつちやうから……。また今度も一人でいつちやうじゃないかって、思っただけ……。」

「一人じゃないよ……。いつもみんなからは力をもらってるし……。それにみんながいたから僕は戦ってこれたんだ。」

スバルはだから大丈夫。と委員長に言う。しかし、まだどこかルナの顔は暗いままだ。
委員長？とスバルは尋ねる。するとルナは顔をあげてみんなに話すように言う。

「私ときどきおもうのよ……。みんな命をかけて戦ってるのに私だけこんなんでいいのかって……。」

ルナは自分がみんなと戦えないことに悔しさを覚えはじめていた。電波変換ができないルナは到底戦うことなどはできない。できるのは所詮サポートだけという思いが最近になってルナの頭の中に浮かんできたのだ。そしてルナはつぶやく。

「私だって……みんなと戦いたい……」

（委員長……）

ルナの言葉を聞いていたキザマロが突然席を立ち上がり喋る。

「ボ、ボクだって……！みんなと戦いたいです……！」

その言葉を聞いていたらしい前に座っていた男の客が突然立ち上がりスバル達のほうを見る。

帽子をかぶっていていまいち誰かわからない。

その男は委員長とキザマロのほうをむいてしゃべりだす。

「そんな焦んなくてもいいんじゃないか??」

(ん?...この声は.....)

その男はニツと笑うと帽子をとった。

そこにはいつもと違う服装で気がつかなかったが、見慣れた顔の男がたっている。

スバルは男の正体に気づき一番最初に声をあげる。

「あ!、暁さん!？」

決意

「なんで暁さんがここに!？」

スバルはシドウが突然現れたことにビックリして車内で声をあげてしまう。

「おい……………スバル声でかいぞ……………」

「あ…ゴ、ゴメン……………」

スバルはとりあえずビックリしたときにたちあがってしまったので椅子に座る。どうやらシドウがここにいるのはアダムが現れたコダマ小学校の屋上に周辺調査をしにくためらしい。

シドウはコホンと咳込むとルナとキザマロのほうによっていく。

「えーと……………。白金ルナと最小院キザマロ……………だな？」

2人はコクつと頷く。

「まあそう焦る必要もないだろ。それにサポートだつて重要な役割なんだぜ……………？つていうかどうしたんだ……………？みんなして黙つて……………」

「実は……………」

スバルはボーリング場で起きたことをすべてシドウに話した。
暁はなるほどね……………といい空いてる席に腰をかける。

「世界は闇につつまれる……………ねえ……………いかにも悪役がいいそう
なセリフだな……………」

暁はそういい、ハア〜とため息をつく

「それでどうすんだよ。暁。サテラポリスはやっぱりあいつを捕らえるんだろ？」

ジャックが尋ねるとシドウは腕をくみ、うーんという。

「まあそうだな……やっぱそうなるだろうな。……といってもアイツの情報は全然ないし、これといってまだなにも仕掛けられてないからなんとも言えないんだけど……。まあ今回はスバル達になにもなくてよかった……。」

シドウはよいしょと席から腰をあげる。

どうやらコダマタウンにいったようだ。

「じゃあ俺は行くけど……元遊撃隊メンバーにプラスジャックは明後日サテラポリスまで来てくれないか？今後のことについて話し合いたいんだ」

（明後日……？ああ確か月曜日学校休みだったな……）

スバル達はそう思いわかりましたと頷く。

「あ、あと白金ルナと最小院キザマロ」

2人は突然名前を呼ばれはいつ！と返事をする。

「どうやら戦えないことで悩んでるようだがおまえらだってじゅうぶん戦ってるんだぜ？」

「でも……私みんなと違って電波変換出来ないし……。」

2人が落ち込んでいる様子を見てシドウはハハッと笑う。

「だったら自分が今みんなのために何ができるか考えればいいんじゃないのか？お前達にしかできないことが何かあるはずだと思うけどな。」

シドウはそういい2人の肩にポンと手を置く。

「まあ……俺もたいしたやつじゃないからわかんないけど、2人の存在はきつとみんなの力になってる。それにお前らのサポートがあったおかげでみんなは戦ってこれたんだと思うぜ?」

「そうだぜ!委員長、キザマロ」

ゴン太に続いて皆が委員長とキザマロを呼びかける。

「みんな……。そうよね……。私達にしかできないことが何かあるはず……。
よしっ!いくわよキザマロ!」

「ハ、ハイッ!」

ルナはみんなにじゃあねと言うとキザマロをつれて一足先に帰って

いつてしまった。

それにつれられるようにみんなもウェーブライナーから降りる。

みんな帰る方向が別なのでスバルとミソラはみんなに帰りの挨拶をする。2人はとりあえず帰宅した。スバルもミソラももうボーリングと戦いでクタクタだったので明日にそなえて今日はすぐにそれぞれの布団に入って眠った。

ドリームパークへ

「んっ！………」

スバルは目覚めると窓のほうをみる。
ちょうど空に朝日がのぼりはじめていた。

スバルはとりあえず布団からでる。

今日は朝からミソラと出掛ける日なのでスバルはそのための準備を始めた。

スバルはすぐに準備を終え、時間はまだまだあまっているので、とりあえず朝食をとるためにスバルは一階に降りた。リビングの椅子にはミソラが座っている。

どうやらもう起きていたらしい。

スバルはとりあえずミソラに挨拶をする。

「おはよう、ミソラちゃん」

「あ！スバル君、おはよう！」

スバルはミソラと挨拶を交わし、席に着いて朝食を食べはじめた。それを見ていたミソラがはなしかける。「スバル君、今日はどこにいく日か…覚えてるよね？」

スバルはミソラの問いに朝食を食べながらもちろんと言う。

「じゃあ、いけるようになったら私の部屋まできてね！」

ミソラはそういうと自分の部屋に戻っていった。

スバルは急いで朝食を食べ終わると顔を洗ったりして準備をととのえる。

スバルはすべての準備を終え、腕にハンターを装着してミソラの部屋にいった。

「ミソラちゃん！……準備できたー？」

ドア越しにスバルが叫ぶ。今行く、と言う返答が返ってきて20秒くらいで部屋のドアが開く。

「じゃあいっつか…ミン……！？」

スバルがみたミソラはいつもとは違って下はかわいいミニスカート。上はいつもとは違う白いパーカーをきている。とても小学生とは思えない雰囲気を出している。おそらくこの日のためにかったものなのだろう。まだ新しい感じがする。

「似合うかな……………??」

「……………う、うん！すごい似合ってるよ！！」

スバルはすこし動揺しながら答える。
答える前にミソラをみてボーッとしていたので確実にみとれていたのだろう。

「ホント！？嬉しい♪」

ミソラはそういうとスバルの手をとる。

「じゃあ、いこっか」ミソラこの日のために買ったと思われるブ
ーツをはき、スバルの手を引っ張り家を出た。

「ほら！はやく、はやく！ウェーブライナーにおくれちゃうぞ！」

「ミ、ミソラちゃん！早過ぎるよ！！」

ミソラはスバルの手をとりながらウェーブライナーの改札前までダ
ッシュする。2人が到着すると同時にウェーブライナーがちょうど
到着した。

2人はそのままウェーブライナーに乗り込み、ベイサイドシティに
あるドリームパークを目指した

デート？

―ベイスайдシティ

ウェーブライナー改札前―

ミソラは一番にウェーブライナーから降りて、懐かしそうに辺りを見回す。

「うーん！…久々だなあ…ベイスайдシティ…。」

『そうね……久しぶりだわ……』

町は高いビルで囲まれていて、すごい人とお店の数だ。ここはミソラの故郷でもある。

スバルもウェーブライナーから降りて町をみる。ロツポンドーヒルズよりも都会的な感じがするので都会になれてないスバルはその町の活気に圧倒されている。

「すごい町だね……。油断したら迷子になりそうだよ……。」

ウォーロックもハンターからできてきて辺りを見回す。

『すげえ町だな……』

スバルがボケーっとしてしているとミソラが提案を持ち出してきた。

「ねえ、スバル君！せっかくだからさ、遊園地の前にお店とかいろいろみてまわろうよ！」まだ時刻は10時過ぎ。遊園地に行くにはじゅうぶん時間が余っている。昼食のことも考えてスバルはOKをだした。

どうやらミソラはベイサイドデパート。通称ベイデパというところにいきたいらしい。

（ベイデパ……！？）

スバルはあえてその名前にはふれなかった。

2人が歩き初めて10分ぐらいすると例のベイデパが見えてきた。ものすごい大きさをしている。中にある店の数はハンパじゃないだろう。

「す、すごい大きいね……。」

「うん！だってここは世界一大きいデパートっていわれてるんだよ

それをきいた、ただでさえ真っ赤なスバルの顔はよりいっそう赤くなった

「ち、ち、違うよ!……………」

スバルは急いで誤解をとこうとする

だが実際、誤解といってもミソラのいったことは的中しているのだが。

この場合はごまかそうとしているといったほうが正しいだろう

「じゃあなんでそんなに焦ってるの?」

「そ、それは……………」

スバルが困った顔をしているとミソラは急に笑いだして「冗談だよ!、冗談!」といった。

スバルがまだ顔を赤くしているのをみて、ミソラはとりあえずスバルに目の前にあったアイスクリーム店にいこうと提案した。

ちょうどスバルもあるいて疲れていたのでもちろん賛成した。アイス売り場にいってみると、結構有名なアイス店らしい。

たくさん味の種類があるがスバルは基本バナナしか食べないのでMサイズのバナナを頼んだ。

「ミソラちゃんは何に頼むの？」

「えーっとね……………」

ミソラは少しメニューを見て考えこむ。

「じゃあ、このイチゴ味のギャラクシーサイズください！」

「ギャ、ギャラクシー！？」

スバルはギャラクシーって何なんだよ！と思いメニューに目をやる。
この店の最も大きいサイズで実物大の大きさはハンパじゃない。

「なっ！ミソラちゃんホントにこれ食べるの！？」

ミソラは笑顔でもちろんと言う。

しばらくしてアイスがきた。実際に見るギャラクシーサイズの迫力はものすごい。Mサイズを頼んでる自分が恥ずかしくなってくるようだ。

スバル達はとりあえずベンチに座ってもくもくとアイスを食べる。途中でミソラが「……………バニラおいしい？」とたずねてきたのでそれに返答する。

「うん、凄くおいしいよ。」

「ふーん……………えいつ……………」するとミソラはイチゴ味を食べるのをやめてスバルのバニラにかぶりついてきた。

「ミ…ミソラちゃん！？……………」

当然この行動にはスバルは爆発寸前である。

「エへへ…………………………本当だバニラもおいしいね……………」

スバルは何とか平常心をたもとうと心を落ち着かせる。そしてまたもくもくとアイスを食べはじめる。

途中でイチゴ味も食べる？と聞いてきたがスバルはうまくそれを回避する。

だが、この発言もスバルにとっては危なすぎた。

何とかアイスを食べ終わり、ミソラのほうを見る。スバルはさすがにまだ食べ終わってないだろうと思っていたが、ミソラの手にはアイスがない。

「ミソラちゃんもう食べたの！？」

「うん！すっごくおいしかった！」

（ミソラちゃんの胃袋ってブラックホール……！？）

スバルは前にも似たようなことがあったなと思い座っていたベンチを立つ。

Mサイズでも少食のスバルにはじゅうぶんな量だった。その後もミソラの胃袋はとまらなかった。ラーメン、鯛焼き、タコ焼き……などなどを軽く平らげていく。

ミソラはお腹が満たされると時計を見る。時計はもうお昼を示して

いた。

「スバル君、そろそろいかない？……ドリームパーク。」

「そうだね。もうお昼だしこっか。」

スバルはバイデパからでようとする。途中ミソラが何かを思いだしたようにアツとなる。

どうやらアクセサリー店に行きたいらしい。

まだ若干時間に余裕があるのでスバルとミソラはアクセサリー店に入った。

ミソラはまず、ペンダント売り場に目をやる。スバルもそれにつられて目をやる。

「あっ！スバル君！これみて！すごいいいと思わない！？」

ミソラが手に持ってるペンダントは青い流星を象ったいたってシンブルなつくりをしている。

どうやらスバルも気に入ったようだ。

「へえ……すごいいいと思うよー！」

ミソラはスバルの意見を聞き、決心したようだ。

「ねえ、スバル君。このペンダント、値段もそこまでしないし……一緒に買わない？」

スバルは一瞬赤くなるが、スバルも気に入ってたのでそうだねと言う。

（やったー………！スバル君とお揃いだ………！）

ミソラがアクセサリー店に行ったのはどうやらこれが目的だったらしい。

2人はアクセサリーを買い終わり早速首にかけた。

お揃いということでスバルとミソラの顔が少し赤くなる。

「……………じゃあいっこか？」

「……うん！」

2人はドリームパークに向けてウェーブライナーに乗り込んだ。

デート？

今、スバルとミソラはドリームパーク行きのウェーブライナーに乗っている。

ミソラは大事そうにペンダントを手にとりスバルに見せる。

「ねえ、スバル君。知ってた？…このペンダントに強く願いをこめるとその願いが叶うんだって。」

「へえ…」

スバルはミソラの話しを聞いてペンダントを手にとり、強く念じ始めた。

今スバルが考えているのは簡単にいえば世界平和である。

ミソラは………まあ、あえて乙女の秘密と言うことにしておこう。

ミソラの願いが少し気になっていたスバルがミソラに尋ねる。

「…ミソラちゃんは何をお願いしたの？」

スバルが聞くとミソラは悪戯に笑って「内緒！」といった。

そんな会話をしているうちにウェーブライナーはドリームパークに

到着した。

スバルとミソラはウェーブライナーから降りてドリームパークのゲートをくぐる。

ゲートを抜けるとまわりはものすごい迫力のアトラクションでいっぱいだった。スバルとミソラはアトラクションをみて歓喜の声をあげる。

まず目に入ったのはジェットコースター。

これはスバルが一番苦手な乗り物である。

以前幼い時、大吾に連れていってもらった遊園地で乗ってトラウマになってしまい、もうジェットコースターには乗らないと決めていた。

しかし、ミソラはなんとこれに乗りたいたいと言い出したのだ。

「いや……ゴメン…ミソラちゃん。僕ちょっとああいづのは……………」

「いいじゃん、いいじゃん。せつかくきたんだしさ！ちょっとのってみようよ！」

ミソラの猛攻になんとか抵抗するスバル。

しかし、やがて痺れをきらしたミソラがスバルの手を引っ張りコースターの入口に走った。

「え！………ちょっと……ミソラちゃん！？」

ミソラはスバルを無理矢理引っ張り、入口に入る。

「さて……ここまできちやったし……もうのっちゃんおうよ！」

「……………わかったよ。」

スバルは渋々OKをだしてチケットを2枚買う。

係員にチケットを見せてコースターに乗り込む。

座席は一番前で、スバルは右。ミソラは左に座っている。

（くっ……………落ち着け……………。大丈夫……あの時はまだ子供だったんだ……………。今なら……………絶対……大丈夫……………。）

スバルは必死に自分に暗示をかけて恐怖を払おうとしている。

そんなスバルに対してミソラは横で楽しそうにソワソワしている。

そして時がきてコースターはゆっくりと動き出した。

「う……………うわ……………た、高い……………」

徐々にコースターは上にあがっていく。

「フフフ……♪」

スバルが怯えているのに対してミソラはもうワクワクがとまらないようだ。

そしてやがてコースターは最上部へとたっし…

ゴオオオオオオ！！！！

「うわあああああ！！！！」

「キャアアアアア！！！！」コースターが一気に斜面を下るとともに辺りは乗客達の悲鳴に包まれた。

ミソラの悲鳴は楽しそうだったがスバルの悲鳴はあきらかに恐怖に包まれた悲鳴だった。

15分ぐらいたってやっとコースターはゴールに到着した。

「ふう〜……楽しかったー♪」

ミソラが喜んでいるのに対してスバルは横で死んだような顔をしている。

「スバル君……大丈夫？」

ミソラが何度も尋ねるとスバルはハッ、となる。

「う…うん……。」

口ではそういつているが席をたってみると左右に体がふらふらして
いていまにも倒れそうだった。

ミソラはスバルの体を心配し、とりあえずベンチに座ることをす
めた。

「ふう……」

スバルがベンチで体を休めてから約30分。だいぶ体の状態も良好
になってきたようだ。

「ゴメンね…スバル君。私が無理矢理……。」

ミソラが悲しい表情をするとスバルは慌てて「ミソラちゃんのせい

じゃないよ！」と誤解をとく。ミソラが少し落ち込んでいるのでスバルは他のアトラクションに乗りうと提案した。

今度はスバルがミソラを無理矢理アトラクションに乗せた。もちろん絶叫系ではなく、ゆったりと楽しめるものだ。アトラクションに乗っているうちにミソラに笑顔がもどってきた。

そんなこんなで2人がアトラクションを楽しんでるうちにいつに帰る時間になってしまった。

「なんか…楽しい時間ってすぐ過ぎちゃうよね…。」

ミソラがさびしそうにつぶやく。スバルもそれにうんとうなずく。

「ねえ、スバル君…最後にあれに乗らない？」

ミソラが指さす方向には大きな観覧車があった。どうやらこの遊園地の一番のスポットらしい。

スバルもまだウェーブライナーがくるまで時間が余っているのでそれに了承する。

「じゃあ、いこっか。」

ミソラはスバルの手をとり観覧車へ向かった。

好きだよ

スバルとミソラは2枚組のチケットを買い、観覧車に乗り込んだ。
中は若干広く、窓から見えるオレンジ色の夕焼けがとても綺麗だった。

今、スバルとミソラは向かいあって座っていて、スバルは景色をながめている。

「みてみて、ミソラちゃん。景色が綺麗だよ。」

スバルはそっくり窓の向こうを指さす。

スバルが景色を見て、楽しんでいるのに対して、ミソラはどこか落ち着きがない。

（どうしよう……言おうかな……。あのこと……。でももしだめだったら……）

「ミソラちゃん？」

「わっ!?!」

考え事をしていたときに突然話しかけられてビックリしたミソラは思わず声をあげてしまう。

「どうしたの…? ミソラちゃん…? さっきからずっと考えこんで…」

するとハーブがハンターの中からミソラに小声で話しかけてきた。

『ミソラ…! 今日はこれをいうためにスバル君と出掛けて、観覧車までのったんでしょ! 勇気を出しなさい!』

「う…うん…」

「ミソラちゃん…?」

スバルは心配そうにミソラの顔を覗きこむ。

（そうだ……。私…後悔しないってきめたんだ……。……よし！）

ミソラは決心し、スバルの名前をよぶ。

「スバル君！！」

「は、はい！！」

突然名前を呼ばれてスバルは少し跳ね上がる。

「…スバル君は今、好きな…人とかっている？」

「す、好きな人！？」

思いもよらない質問をされ、スバルは戸惑う。

（僕の好きな人……。考えたこともなかったな……。）

スバルはそう思い何となく頭の中に女の子の像を浮かべてみる。すると、頭の中に出てくる女の子は、今日の前にいるミソラばかりだった。

（な、なんだ……？この感じは……？）

スバルは普段考えないことで自分の胸の鼓動が高鳴っていくのを感じていた。

それはミソラを考えれば考えるほど高まっていく。とりあえずスバルはどうだろう？とごまかす。

ミソラはそれを聞いて「そう…」と答え、深く深呼吸する。

「スバル君……！」

「は、はい……！」

もう一度名前を呼ばれ、さっきと同じように返事をする。覚悟を決めたミソラはスバルを見つめて口を開く

「私、ずっと前からスバル君のことが好きでした！
私でなければお付き合いしてください！！」

ミソラはハッキリとスバルにそう言つと頭を下げて手を差し出す。

「……………」

（ああ……そうか。今わかったぞ。僕はこの子のことはずっと前から好きだったのか…………。）

スバルの頭の中の女の子の像がミソラと確信すると、スバルは本当に自分の好きな人に気づいた。

「僕もミソラちゃんのことを好きでした。僕でなければよろしくお願ひします。」

そついいスバルはミソラの手をとる。

「ホント！？」

「ホントだよ。」

「ホントにホント!？」

「ホントにホントだよ。」

「や、やった〜!!!」

ミソラはかなり嬉しそうな表情をしてスバルに抱き着いた。

「う、うわっ!ミソラちゃん／＼／＼／＼／」

「えへへ／＼／＼／＼／」

ミソラはスバルに抱き着くとスバルにほお擦りをした。これにはスバルの顔は夕日に負けないぐらい真っ赤に染まった。それからしばらく2人はラブラブモードで肩を寄せ合いながら景色をみていた。もう少しで観覧車が一周するところで、ミソラがスバルに話しかる。

「ねえ、スバル君。せっかくカップルになった記念の日だからさ、その記念にキスしようよ!」

「キ、キス!？」

スバルはキスという言葉を聞き、顔を真っ赤にする。

「いいじゃん、いいじゃん」

スバルもせつかくということで断る理由も毛頭ないので「う、うん……」と承諾する。
するとミソラはスバルの顔に自分の顔を近づけた。

「スバル君。」

「ん?」

ミソラはスバルの名前をよぶと、「好きだよ」と一言いつて自分の唇をスバルの唇と重ね合わせた。

コッソン……

唇を重ねたと同時に二人のペンダントも同じように重ね合わさった。

ラブラブ

「ん……。」

数秒口を重ねたあと二人は名残おしそうに唇を離す。

「えへへ…… / / / / /」

ミソラは顔を赤くして、照れ隠しなのか、スバルの胸に顔を埋める。スバルもスバルで湯気がでてるんじゃないか？と思うほど真っ赤な顔をしている。

スバルはなんとか冷静に対処し、ミソラにゆっくりと手をまわす。

（ミソラちゃん……やっぱりかわいいな……。なんかいいにおいもするし……。）

「どうしたの？スバル君？」

「……へっ!？」

突然名前を呼ばれてビクツとなるスバル。

ミソラの顔を覗きこんで見とれていたわけだが、まさか「見とれてました。」と言えるわけもないのでスバルは軽くごまかす。しかし、それを見抜いていたハープがスバルの嘘を見破る。

『スバル君……正直見とれてたでしょ？……』

「え……！？だ、誰に？」

『誰につて……ミソラによ。』

ハープの問い詰めに耐え切れなくなったスバルは「はい、そうです見とれてました……」と顔を赤くしながら白状した。

ミソラもスバルにハッキリ言われ「もう……ノノノスバル君ったら……ノノノ」といつて顔をさらに深く埋めた。三者からみればかなりのラブラブカップルである。

そんなこんなで観覧車もちょうど一周し、2人は観覧車を降り、時間も来てしまったので、ウェーブライナーに乗り込みコダマタウンへ向かった。

帰り道もミソラはスバルの腕にくっついてはなれなかった。今まで思ってきたスバルとカップルになれたことがよほどうれしかったのだろう。

もともとスバルには異性としての好意をいだいていたが、完全にスバルを好きになったのはメテオG事件の少しあとにあったある出来事だった。

ミソラはその出来事からスバルを完璧に意識しはじめたのだ。

それは約4ヶ月前の出来事だった…

ラブラブ（後書き）

今回は第一話なみに短くなってしまいました…すいません（汗）
次話からミソラの過去編に突入したいと思うのでよろしく願います。

ミソラ―過去編？

「んーっ……！」

ミソラはベッドから体を起こす。日の光がカーテンから漏れている。どうやら天気は予報どりの快晴のようだ。

学校の終業式も終わり、今は冬休みの真っ最中。そして今日は12月25日。つまりクリスマスだ。

ミソラははなうたを歌いながらお風呂場に向かう。

『やけにご機嫌ね？ミソラ？』

「うん！だって今日はスバル君達とクリスマスパーティーだもん！」

そう。今日はクリスマスということで午後6時からみんなで委員長の家でパーティーをする予定があった。前にスバルからメールで誘われていらいミソラはずっと楽しみにしてきたのだ。

シャワーを浴び終わるとミソラは私服に着替えて朝食をとった。今日は仕事はオフをもらっているのだから朝から特にやることがなかった。なのでミソラはとりあえず時間がくるまでは曲作りに専念することにした。

今回の曲はクリスマスをテーマにした曲らしい。

曲作りが一段落ついて、ふっと、時計を見る。
時計の針はもう昼を過ぎていた。

「ふう……。」

『…お疲れ様。』

ハープがハンターから出てきて言う。

『そういえば、ミソラ。あれはもうできたの?』

「うん、バッチリだよ。」

ミソラはそういうとテーブルにおいてあった袋から青いマフラーを取り出した。以前からミソラがコツコツ編んでいたもので、どうやら今日、スバルにクリスマスプレゼントであげるつもりらしい。

何度も失敗したりしたが、このマフラーは何日もかけて編み出した、渾身の一品である。

「スバル君、喜んでくれるかな…?」

『ミソラが編んだマフラーもらって、喜ばない男の子なんていないわよ。』

ハープはそういうとハンターの中にもどっていった。確かに、アイドルから手作りのマフラーを貰うなど、男の子には羨ましすぎるだろう。

ちなみにスバルの作ったあとも、多少クオリティに差があるがゴン太達の分もつくっておいた。

そんなこんなで時刻は5時30分。

ミソラはコートをきて、マフラーの入った袋を持ち、家を出た。

外は雪が少しぱらついている。ミソラは雪の中を歩きだした。町はクリスマスで盛り上がっている。

ミソラが5分くらい歩きだしたところでウェーブライナーの改札が見えてきた。

その時だった……

「……!?!」

何物かの視線を感じたミソラは辺りを目だけでキョロキョロ見回す。

「……ハープ。」

『ええ。…誰がいるわね…。』

ミソラはとりあえず、普通に歩きだす。どこにいるかはわからないが、確実に何物かの視線をかんじる。

「!？」

その視線が突然消えて、後ろからその気配を強く感じたミソラは瞬時に後ろを振り返る。

そこに立っていた男は黒っぽいシルクハットに黒っぽいマント。特徴的な仮面。そして黒っぽいステッキを持っていた。男の正体はファントム・ブラックだった。

「あ、あなたは…!？」

ファントムは「ンフフ…」と笑うと黒い縄状のものを飛ばしてきた。

「…っ!」

縄状のものに締め付けられたミソラはその勢いで地面に倒れこんだ。

『ミソラ!電波変換よ!』

「う…っん!」

ミソラは電波変換しようとしたが、縄に縛られていて、電波変換できなかった。

「響ミソラ…。少し付き合ってもらおうよ？私の復讐劇に…。」

ファントムはそういうとミソラを抱えてウェーブロードにのった。

「い、いや！！離して！！」

ミソラは必死に抵抗するが生身の人間が電波体にダメージを与えられるわけがなかった。

「私をどうするつもり！！」

「さっきもいったらろう？私の復讐劇に付き合ってもらおうと。」

「復讐劇……？ま、まさか！？」

ハイドはソフフと笑う。

「…そうだ。ロックマン…。いや星河スバル…。今度こそあいつに

復讐するのだ……」

ハイドはさらに大きく笑うとベイサイドシティの倉庫群に向かって
いった

ミソラ―過去編？

「ミソラちゃん…おそいなあ？……」

時刻は6時20分。今スバル達は委員長の家にいる。ミソラがまだ来ていないのでまだパーティーは始まっていない。

「なあ……委員長。俺もう腹がへって倒れそうだよ……。」

「ダメよ。パーティーは全員揃ってからじゃないと。」

目の前の食事をお預けにされていたゴン太の腹がグウゝとなる。

「僕……ちょっと電話してみるよ。」

ミソラのことか心配になってきたスバルはハンターを手にとりミソラに電話しようとした。

ミソラの電話番号を入力してコールボタンを押そうとしたとき…

ブルルルルル……

「ん？」

突然メールの着信音が鳴った。

（誰からだろ……？）

スバルはメールの差出人を見るが、名前は書いていない。
不思議に思いながらもスバルはメールを開く。

「星河スバル。いや、ロックマン。お前のブラザー、響ミソラは私が預かった

かえして欲しければベイサイドシティの海岸前にある2番倉庫までこい。もちろんお前一人でだ。もし仲間を連れて来たらこの女の命はないと思え。」

「…っ なっ！」

スバルはメールをみて青ざめた表情をする。

「どうしたんですか？スバル君？」

キザマロがスバルに尋ねるとスバルは「な、なんでもないよ」と言う。

「じゃあそれは誰からのメールなんだ？」

ジャックがスバルのハンターを覗きこもつとしたので、スバルはとっさにメールの画面を閉じて立ち上がる。

「……なんか母さんがちょっと帰ってこいっていつからいっかい家に戻るね。
たぶん、すぐ戻ってくるから。」

「ちょ、ちょっと！家に帰るって……パーティーはこれからなのよ！？」

委員長はスバルを呼び止めようとするがスバルはダッシュで靴を履いて、委員長の家を出た。
外はまだ雪がぱらついている。

『いくんだな……?』

「うん……。誰だかしらないけど、みんなに迷惑かけるわけもないしね……。」

『へっ……!』

ウォーロックは久々のバトルの予感がして、腕を振り回している。

「はやくいかないと……ミソラちゃんがあぶない!! いくよ! ウォーロック!」

スバルはそういうと、ハンターを空にかざす。

「トランスコード! シューティングスターロックマン!」

スバルはロックマンになると、ベイサイドシティに向けて、駆けていった。

ミソラ―過去編？

ガガガッ…

ロックマンは倉庫の扉を開ける。中はいくつか明かりがついていて少し明るい。

「ミソラちゃん…！」

ロックマンは倉庫の奥の柱に縄のような物で縛り付けられているミソラをみて、ミソラのほうに駆け寄ろうとする。

「スバル君……きちゃ…ダメ……」

ロックマンがミソラに向かって走っていると、突然、黒いステッキがロックマン目掛けて飛んできた。

「ぐっ！？……」

ロックマンの腹部にステッキが直撃し、ロックマンは後ろに倒れこむ。

「だ！誰だ！」ロックマンは倒れながらもステッキが飛んできた方向に向けて声をあげた。

その部分には明かりがついていないので黒いシルエットが見える。そのシルエットは徐々にロックマンに近づいてきた。

「お、お前は！ファントム・ブラック！！」

「ンフフフフ……。会いたかったぞ…ロックマン…。」

シルエットの正体がファントムだとわかったと、ロックマンはとっさに立ち上がって、体制を立て直す。

『ケツ…！ミソラをさらったのがコイツだったとは……。やっぱりあの時、ちゃんとトドメをさしておくべきだったな…。』

「……いまさら僕たちに何のようだっていうんだ！！」

ロックマンがファントムのほうに向けて叫ぶとファントムは「ンフフ…」と笑う。

「何のよう……。私は今までずっとこの瞬間をまっていたのだがね。」

「……………どういう意味だ……………」

ロックマンがファントムに聞くと、ファントムは突然狂ったように大きく笑いだしてロックマンを指さす。

「復讐だよ！！私はずーっと待っていたのだ！！」

いつも私の脚本を読もうとせず、すべてをだいなしにしていくお前への復讐だ！！お前さえいなければ私は今ごろ完璧な人生をおくっていたのだ！！お前さえいなければああ！！！！！！」

ファントムは荒れ狂った顔でロックマンに叫ぶ。

『コイツ……………狂ってやがる……………』

ロックマンはファントムにバスターを向ける。

するとファントムは急に冷静さを取り戻し、ロックマンに喋りかける。

「おおっと……………。ちなみにいいわすれていたが、私に攻撃すれば大変なことになるぞ……………」

「……………?」

ファントムはミソラのほうに移動し、ミソラを縛っている黒い縄を
てにとる。

「この縄は私の特別制でね……。私が君からダメージを受けたと同
時に起爆する縄状の爆弾なんだよ……。」

「な、何だって!？」

ロックマンはファントムに向けていたバスターをさげる。それと同
時に、ファントムが一気に近づいてきて、ロックマンにステッキを
何度も切りつけた。

「さあ!!--どうする!?!ロックマン!!--」

「ぐはっ……!!--!!--」

ステッキを何度かくらったあと、ファントムの蹴りをくらい、ロッ
クマンは後ろに倒れ込む。

「スバル君……！私のことはいいから……その人を……倒して……！」

ミソラはボロボロになったロックマンに訴えかけるが、当然、スバルはそんなことを聞くはずがない。

「ダメだよ……ミソラちゃんを見捨てるなんて絶対にできない……」

「スバル……君……」。

2人の会話を聞いていたファントムは不快そうな顔をしてミソラの横に移動した。

「さっきからうるさいのだよ……。君も復讐の対象……それを忘れてもらっては困るのだよ……！」

ファントムはミソラの腹部に蹴りをいれる。

「うっ……。」

「お、お前!!」

ファントムの蹴りの衝撃でミソラの手を持っていたマフラーの袋が手から離れた。

「ん？なんだ…これは？」

ファントムは袋の中に入っていたマフラーを取り出す。

「や、やめて！触らないで!!」

ミソラはファントムからマフラーを取り上げようとしたが、当然、縄に縛られているため身動きはとれない。

ファントムはマフラーに入っていた紙を取り出す。

「スバル君へ……………ほう、なるほどな……。これはアイツへのプレゼントというわけか。」

ファントムはソフフと笑うとステッキを構える。

「や、やめて!!お願いだからそれだけはやめて!!!!」

ミソラは必死になってファントムを止めようとするが……

「フン!!」

ファントムがステッキを振り回したと同時にマフラーの毛糸が宙を舞った。

「あ……ああ……。」

ミソラは力無く泣き崩れる。

「せっかく……何日も……かけて……スバル君のために……編んだのに……うっ……うっ……。」

「ソフフフフ……ソフフフフフフフフ!!!!」

ファントムはミソラが泣き崩れたのを見て愉快そうに大笑いしている。

その一部始終を見ていたロックマンがゆっくり立ち上がりギロツとファントムを睨む。

「……………おい……………」

「ん？」

ファントムは笑うのをやめてロックマンのほうをみる。

「お前……………今何をした……………!!!!」

「何をしたって……………この女のマフラーを切り刻んだだけだが……………それがどうかしたかね？」

ファントムが愉快そうにロックマンに近寄る。

「許さないぞ……………」

ロックマンは、ものすごい威圧感をだしてファントムを睨みつけた。

「!？」

その威圧感にさすがのファントムもビクツと怯む。

「なんでお前はそうやって平気で人の思いを踏みにじることが出来るんだ!!」

僕は許さないぞ……。ミソラちゃんの思いを踏みにじったお前だけは絶対に許さない!!!!」

ファントムはその威圧感に圧倒されたが、よくよく考えればスバルは自分に攻撃できるわけがないとおもい呼吸を落ち着かせる。

「フ、フン。強がったところで今の貴様に私を攻撃することなどできはしない!!」

「それでも僕は絶対にお前を倒す!!」

ロックマンはファントムの前で構える。

「いくぞ!!ウェーブバトル!!ライド・オン!!」

ミソラ―過去編？

「はあああああつ！！！！！」

ロックマンは体を埋めて、なにかオーラのようなものを発している。

「??……何をしている??」

ファントムは力をたくわえているようなロックマンを見て、ステッキを構えてとりあえず攻撃に移った。

「まあいい……死ね！！ロックマン！！！」

ファントムがロックマンに切り掛かろうとしたとき…

「はあああつ！！！」

ロックマンは体を一気に起こして、たくわえていたノイズをいき

に放出した。

「ぐっ……！なんだこれは……！電波に……乱れが……。」

ノイズの放出をくらい、電波体に異常が発生したファントムは地面に膝をつく。その異常のせいか、ミソラを縛っていた縄が消えた。

『今だ！！スバル！！』

「わかってる……いくぞ……！」

ロックマンはファントムに向けて両手を構える。

「うおおおお！！アトミック・ブレイザー！！」

ものすごい業火がロックマンの両腕から放出され、その業火はファントムの体を包んだ。

「ぐっ！！ぐあああああ！！！！！！」

アトミック・ブレイザーをくらったファントムは電波変換がとけて、

地面に倒れ込んだ。

「はあ、はあ、はあ……」

それと同時にロックマンも電波変換をとく。

『ヘッ……！ 案外やれちゃうもんだな、ノイズ放出。』

「ぐっ……。」

といってもさすがのノイズにスバルの体も限界が近いようだ。スバルは膝を地面についた。

「ぐっ……。なぜだ……。なぜお前達は……。いつも私の脚本どうりに動かない……。」

ファントムは倒れながらも力無く呟く。

『だーかーらあー！！ お前の脚本なんてしまったこっちゃんえっていつも言ってたんだろー！！』

ウォーロックが叫ぶとファントムは「くっ……」といい、力尽きたのか、ピクリとも動かなくなった。

「スバル君……！」

スバルが苦しそうなを見て、縄がとけたミソラがスバルに駆け寄ってきた。

するとミソラは急にスバルの胸に抱き着いて泣き出した。

「ごめんなさい……いつもいつも迷惑ばかりかけちゃって……。」

突然抱き着かれて一瞬あわてるスバルだが、冷静に対処し、スバルもミソラに手をまわす。

「そんなこと……。それよりもミソラちゃんが無事で本当によかった……。」

「スバルくん……。」

ミソラはゆっくりスバルから離れて、切り刻まれたマフラーの一部をてにとる。

「でも……マフラーが……」

「大丈夫だよ……。ミソラちゃんが僕のためにつくってくれたってことだけで僕はすごい嬉しいし……。またつくってくれたら嬉しいな。」

「で……でも……私……」ミソラがまた、うつ、うつ、と泣き出したのでスバルは少し焦った表情を見せるが自分のことで泣いているミソラを見て、スバルはミソラをゆっくり抱きしめた。

「大丈夫……。ミソラちゃんの思いはちゃんと伝わったから……だからもう泣かないで？」

「スバ……ルくん……」（スバル君のそばにしていると……なんだか凄く落ち着くな……。）

ミソラは体をスバルに委ねた。

「もう少し……このままでいさせて……。」

その後、2人はミソラが落ち着くまで抱き合っていたという。

ファントムはあのと、スバル達によって、サテラポリスに連行され、サテライト刑務所にいれられたらしい。

この出来事からミソラがスバルに猛アタックし始めたのは、言うまでもない。

スバルもスバルで、この出来事からミソラをかなり気にし初めたようだが……

ミソラ過去編

完

一緒に

「「ただいまー」」

スバルとミソラはデートを終えて帰宅した。

スバルとミソラが家に入った時に、2人は手を繋いでいたので、それに気づいたあかねがスバルに尋ねる。

「あら…？スバルとミソラったら、手なんか繋いじゃって……どうしたの？」

「……ん？、……ハッ！！」

ミソラと手を繋いでいることをすっかり忘れていたスバルはハッ、となってミソラから手を離す。

「べ、別になんでもないよ……。」

「……ふーん……。」

冷や汗をかいてるスバルをみてあかねは「フフッ…」と微笑む。どうやらスバルとミソラのことにはもう気づいたようだ。

（や…やばい……。もし母さんに僕がミソラちゃんと付き合っているなんてバレたらどうなるかわかったもんじゃない…。ミソラちゃんにはアイドルなんだし……。それに……）

「スバル？」

「……へっ！？」

突然名前を呼ばれてビクツとなるスバル。

「どうしたの？スバルったら？そんなに焦っちゃって……。」

「……………だ、だからなんでもないって！いこつ、ミソラちゃん。」

「え？ちよつと……スバル君？」

スバルはミソラの腕を引っ張り、2階へ上がっていった。

「スバルったらあんなに焦っちゃって……。バレバレよ。」

あかねは「フフツ」と笑うとやり残していた家事に戻った。

――スバルの部屋――

「スバル君ったらどうしたの？そんなに焦っちゃって……。」

「どうしたのって……もしミソラちゃんが僕と付き合ってることが
ばれれば大変なことになるでしょ？」

「私は別にいいけどな――？」

「……………んなっ!？」

スバルはミソラにそれだけは本当にダメと念入りに頼む。それはこれからの自分達の事を考えての行動なのだろう。もしミソラに彼氏がいるなどわかったら、ミソラのこれからのアイドル活動も危ない。

それにスバルもこれ以上目立つのはゴメンだったのだろう。
スバルの説得もあってミソラは1時間でやっと承諾してくれた……
……のだが、ミソラはそれにある条件を持ち出してきた。「一緒に
寝るって……そんなのダメに決まってるでしょ!？」

「じゃあ付き合ってるってことお母さんにいつちやうよ?」

「うつ……………」

スバルは戸惑うが、ばれるよりはマシだと思い渋々承諾する。それ
に、ミソラと一緒に寝ることに悪い気はしない。

……が、まだ小学生のスバルには少し刺激が強すぎるのだろう。

消灯の時間がきて、ミソラはスバルのベッドに入る。

「ミ、ミソラちゃん……!? くつつきすぎだって!?!?!?!」

「いいじゃん、いいじゃん。」

布団のなかでミソラはスバルにべったりくつついている。これには
スバルの顔も真っ赤になっている。

なんとか呼吸をととのえたスバルは眠りにつこうとした。その時、
ミソラが口を開く。

「スバル君……………」

「…………ん、何? ミソラちゃん?」

寝ながらも見える夜空を見上げてミソラが呟く。

「私達が初めて会ったときのこと……覚えてる?」

「え……？もちろんだよ。」

スバルは照れ臭そうに笑う。

「あれが僕達の出会いだったね……。」

「……………うん。」

ミソラも照れ臭そうにすると、スバルの肩に顔をのせる。

「懐かしいな……。あの時は僕も色々大変だったからなあ……。ホント、ミソラちゃんには感謝してるよ。」

「そんな…お礼を言わなきゃいけないのは私のほうなのに…。スバル君がいなかったら今頃私はどうなってたか……。」

「ハハツ……。僕だって、ミソラちゃんがいなかったらどうなってたことか……。」

2人は顔を赤くしている。2人の手は自然と繋がっていた。今までの思い出を語り始めてから随分時間がたった。2人の顔は少し眠そうだ。

「……………もう寝ようか？」

「……………うん。」

スバルはそういうと眠りにつこうとした。そんなスバルにミソラはさらに深く抱き着き、悲しそうな声で呟く。

「……………ねえ、スバル君……………」

「…ん、どうしたの？」

少し悲しげな表情をするミソラにスバルは不安そうに聞く。
ミソラはスバルの体に顔を埋めながら呟く。

「……………また始まっちゃうのかな……………戦いが……………」

「……………ミソラちゃん……………」
スバルは悲しそうな顔をするミソラに戸惑う。

「あのアダムっていう人……………、なにか、今までとは違うような……………、
とにかく凄いものを感じたの……………。だから……………私……………みんなが心配で
……………」

今にも泣き出しそうなミソラを見て、スバルはそつと、ミソラの体
を抱きしめた。

「大丈夫……………何がきても必ず僕が追い払うから。誰も傷つけさせや
しないから。それに……………」

スバルは少し間をおく。

「君は絶対、僕が守るから……………」

「スバル……くん……。／／／／」

思いもしないことを言われて戸惑うミソラだが、ニコツと笑い、またスバルの肩に頭をのせた。

「……絶対だよ？」

「……うん……。」

2人は抱きしめあいながら、深い眠りについた。

サテラポリスへ

「んーっ……。」

スバルはベッドから体を起こす。なんだかんだで、夜遅くまで話し込んでいたので、昨日の疲れがとれていないのか、まだスバルは眠そうな顔をしている。

とりあえず今日はサテラポリスに來いとシドウに言われていたので、隣にいるミソラを起こす。

「起きて…ミソラちゃん。今日は暁さんの所にいかなきゃ…。」

「…うん……。あ、おはようスバル君……。」

ミソラはベッドから起き上がり、「うん」と背中を伸ばす。

「じゃあミソラちゃん。準備が出来たら一緒にいこうね。」

「うん！」

ミソラは自分の部屋に戻り、出掛ける準備をしにいった。

スバルも着替えをすませて朝食などをとる。準備を終えて、スバルはハンターを腕に装着する。それと同時にミソラがスバルのもとに駆け寄ってきた。

「……じゃあいこっか？」

「うん！」

2人は電波変換し、サテラポリスを目指した。ちょうどサテラポリス本部まで後少しのところでウォーロックが突然出て来てスバル達

を引き止めた。

『ちよつとまで、スバル。』

「ん？どうしたの？ロック？」

ウオーロックは突然辺りをキョロキョロと見回した。

《きのせいか……？いや……だか……確かに……》

「ロックてば！急にどうしたの？」

『ん？ああ、いや、なんでもない。引き止めて悪かった……。』

「??……へんなの……」

スバルとミソラは再びウェーブロードを走り出した。そんな中、ウオーロックはハーブの隣に移動し、ハーブに話しかけた。

『なあ……ハーブ……？』

『ええ……何か……いるわね……。』

ハーブもミソラ達についていきながら辺りを見回す。

『……なんだか、わざと電波を出して威嚇してるみたいね……。』

『ああ……。この感じ……。あの、アダムってやつとは違うな……。ちよくちよく周波数を変えてるせいで場所が特定できねえぜ……。』

『……ん？』

突然、気配が消えて2体はピクツとなる。

《気配が……消えた…？？》

『ウォーロック。ここは考えても仕方ないわ。おとなしくスバル君達についていきましょう。』

『ん…あ、ああ…。』

2体はそれぞれのパートナーのもとへもどっていく。

《ちっ！…………嫌な予感がするぜ…………。》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4974q/>

流星のロックマン4 オペレーションチーム

2011年4月4日17時34分発行